

## ひきこもり者の再接続へとつながる 家族の関わり変容プロセスの一研究

廣瀬眞理子

(関西学院大学大学院文学研究科)

ナラティブデータを媒介として学際的研究として「ひきこもり者の再接続へとつながる家族の関わり変容プロセスの一研究」ということで、1事例の研究をここで発表させていただきたいと思います。なぜナラティブデータを扱うのか、分析を使わせていただくTEMの方法論の1つである発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis:TLMG)を説明して研究の方にかかせていただきたいと思います。

はじめに臨床現場で感じるひきこもり問題についてお話しさせていただきます。現在私はひきこもり支援機関で相談業務に関わっております。ご存じのようにひきこもりという言葉は昔からあったわけではなく、不登校の予後として20世紀後半から立ち上がってきました。正確な数の把握は難しく、32万人とか26万人であるとか、直近の内閣府のひきこもりに関する実態調査では70万人くらいおられると言われております。これらは最小値と考えられますので、実態調査に携わった高塚(2012)は100万人近くの方が家の中でこもった状態におられるのではないかと言っています。

ひきこもりの事例には多彩な精神障害が関与していると言われておりますが、なかでも発達障害の関与が稀ではないとして注目されてきております。生きづらさを抱えてひきこもっている方の中には、おそらく障がいの診断まで至らない方であるとか、福祉制度等の支援の外側のマージナルな方たちが多くおられるのではないかと感じています。「ひきこもっている」ことを心配されることで、ご家族がひきこもり支援の場に来られるのではないかと思います。相談の初めは、ほとんどが親御さんからで、ご本人は来られません。このためご本人不在のままでの支援の開始となります。実感としては「子どもの背中を押す親

の背中を押す支援」をするということになります。直接ご本人と関わることができる親御さんをキーパーソンとしてその親御さんの背中を押す支援をさせていただいています。このことから家族全体をシステムとして理解する必要があるのではないかと考えています。

ナラティブデータを、なぜ扱うのかという点に参ります。本人に直接お目にかからない家族のみの支援でも、ひきこもり問題が解消する場合があります。ではどのような関わりがご本人の社会再接続に作用したのか—この点についてはおそらく量的研究では測れないものですので、個別のナラティブデータに焦点をあてて丁寧に分析しながら見ていく必要があると思います。相談場面においてはクライアントと支え手の対話によって、埋もれた気づきのフィードバック・語り直しが行われているのではないかと考えています。

TEMの説明に参ります。TEMとは複線経路・等至性モデルのことです。ある主題に関して焦点をあてて研究する際に、人間の行動、特に何らかの選択とその後の状態の安定や変化を、複線性の文脈上で描くための枠組みです。TEMではいくつかの概念ツールを用います。今回の研究で使った概念ツールは5つです。等至点（EFP）とは、多様な経験の経路がいったん収束する地点です。はじめに研究者は自らの研究テーマに焦点つけて等至点（EFP）を設定します。その手前の経路にどのようなものがあつたかをみる時に、ある選択によってそれぞれの行動が多様に分かれていく時点を分岐点（BFP）とします。分岐点で自分が選択したと思っているかもしれませんが、実は本人が意識しない文化・社会的な抑制があつたり、行動を促進させる力が働いている場合があります。それらを社会的方向づけ（SD）、社会的ガイダンス（SG）として設定します。これまでの価値が変容するような経験あるいは何らかに得心がいった状態をさし、特に次の行動へと影響を与える時点を価値変容点（Value Transformation Moment：VTM）と設定します。これらのTEMの概念ツールを使って、ナラティブデータを分析していくことになります。

私の研究について説明させていただきます。目的です。ひきこもり者の家族へのインタビュー調査を実施し、ひきこもり者とのコミュニケーションがどのような家族の働きかけによって回復していくのか。さらに家族のどのような関わりが本人の社会再接続へとつながつたのかについて、その変容のプロセスを明らかにすることとしました。社会再接続とはその人に見合った形で社会とつ

ながることというニュアンスで受け取っていただけたらと思います。

調査協力者は、ひきこもりの息子をもつお母さん（B子さん）です。息子のAさんは3人兄弟の長男で27歳です。高校2年より不登校になり高校を中途退学しました。その後何回かアルバイトにいきましたが、しばらくして仕事を辞めてひきこもって8年になります。

インタビューは2回実施しました。20XX年2月に1回目のインタビューをさせていただきました。その後20XX年から2年半にわたり、1ヶ月に1、2回程度、私の所属する支援機関にて来所相談を続けておられます。20XX+3年の6月に2回目のインタビューをさせていただきました。

第1回目では「親が本人をなんとかしてでも社会につなげていかなければいけない」というお話をお聞きました。その後3年を経て、殆ど外出されずに家におられたご本人が社会再接続に向けて動きだすことができるようになりました。どのような家族の関わりがご本人の動きだしに作用したのでしょうか。そのプロセスを丁寧に記述するためにTEM及び発生の3層モデル（TLMG）を採用しました。

分析の方法です。インタビューデータは許可を得てICレコーダーで録音し、逐語録を作成しました。KJ法の手順で意味のまとまりごとにグループ化し、グループ化を繰り返して上位ラベルを抽出し、TEMにおけるカテゴリーとし、時系列に沿って布置しました。

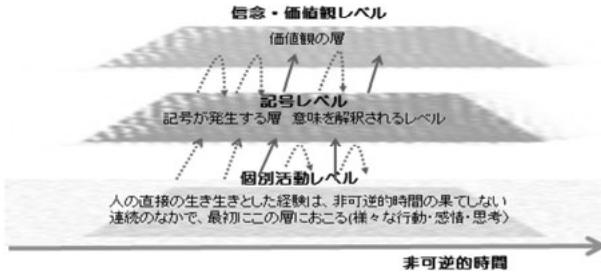
分岐点（BFP）、社会的方向づけ（SD）、社会的促進（SG）を設定しました。お母さんの個人内での心的変容をとらえるためにTLMGを分析に用いて3層で示しモデル化しました。

次に発生の三層モデル（TLMG）について説明いたします。

文化心理学者であるヴァルシナーが提唱したTLMGは、開放システムとしてとらえた人間が、記号を媒介として外界と相互作用する際のメカニズムを3つの層として仮説的にとらえます。上位層は下位層を方向づけ、下位層は上位層の変容の契機となります。3層とは「個別活動」レベルと「記号」レベルと「信念・価値観」レベルです。「個別活動」レベルにおいて、人の直接のいきいきとした経験は非可逆的時間の果てしない連続の中で、最初にこの層に起こります。さまざまな行動・感情・思考を実際に経験していきます。そして「記号」レベルは記号が発生する層になります。記号とは、図とか音とか声とかいろいろ

### 発生の3層モデル (Three Layers Model of Genesis ;TLMG)

開放システムとして捉えた人間が、記号を媒介として外界と相互作用する際のメカニズムを3つの層として仮説的に捉える(サトウ,2009)。  
上位層は下位層を方向づけ、下位層は上位層の実容の契機となる。



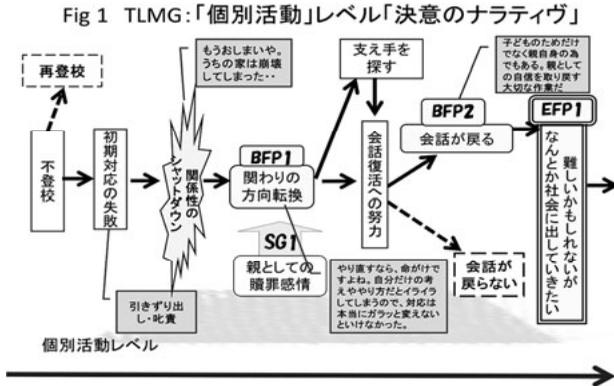
るな形をとるのですが、それ自体が意味を持つものではなく、受け取る側がどう意味づけるのかによって記号となります。「個別活動」レベルの中での経験を意味づけたもの（記号）が「記号」レベルで発生してきます。多くの記号はこのレベルの中で生成されますが、その多くは「信念・価値観」レベルを揺るがすことは殆どありません。しかしそのなかでもある記号によって、その後のその人の信念や価値観を変容させる場面があります。その変容がどのように起こったのかそのプロセスについて見ていきたいと思います。

結果と考察について説明いたします。TEM の概念ツールとその本研究における意味を Table 1 に示します。これらは、分析の結果設定されたものであり、前提として設定されていたものではないことをご理解ください。

Table 1 TEMの概念ツールと本研究における意味

概念	説明	本研究の位置づけ
等差点:EEP (Equifinality Point)	多様な経験の経路がいったん収束する地点。	EFP1:「難しいかもしれないがAをなんとか社会に出していきたい」 EFP2:「Aが自分で目標を決めて行動するのをただ応援していく」
分岐点:BFP (Bifurcation Point)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点	BFP1:「関わりの方向転換」 BFP2:「会話が戻る」 BFP3:「アルバイトの面接に落ちる」
価値変容点:VTM (Value Transformation Moment)	個人において、これまでの価値が変容するような経験、あるいは、何かに得心がいった状態をさし、特に次の行動へと影響を与える時点	「本人の力になれたという実感とその共有」
社会的方向づけ:SD (Social Direction)		SD1「Aは病気ではない」 SD2「世間的には何ひとつ評価されないA」
社会的促進 SG (Social Guidance)	選択肢における個人の選択に有形無形に影響をおよぼす諸力(社会的方向づけ)を象徴的に表したものの	SG1「親としての贖罪感情」 SG2「支え手との相互作用」

次に TLMG の最下層「個別活動」レベルについて説明します (Fig 1 参照)。



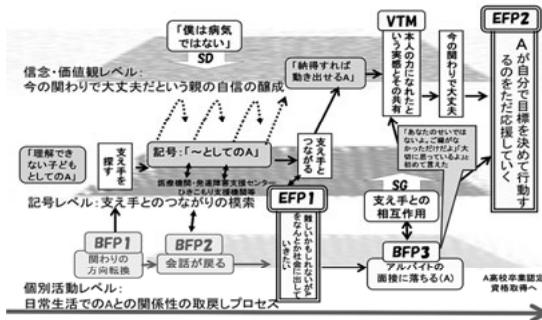
お母さんは、「A は小さい時からずっと心配な子だった。誰からも適切なアドバイスが貰えなかった」ので、いつも「理解できず叱ってばかりいたので自分が母親失格みたいに感じていた」と振り返っています。幼少期から「理解できない子どもとしての A」が記号として立ち上がっていたといえます。Aさんは高校2年で不登校になります。Aさんが学校に行けなくなった時に、家族で「叱咤激励し、親戚を呼んで力づくで引きずり出そう」としましたが、その出来事を契機に関係性がシャットダウンします。激しい家庭内暴力もあったので「うちはもうおしまいや、これで終わりなんだ」とお母さんは絶望的な思いになります。しかしながらもう一度家族としてやり直そうと決心されます。「やり直すなら命懸けで対応をガラリと変えないといけないと思った。1人では無理だから支え手を探すことにしました」と外側に支援を求めて動かれました。このことから「関わりの方向転換」を分岐点 (BFP1) に設定しました

1 回目のインタビューでは、断絶していた親子の会話が戻るようになり、「難しいかもしれないが、A をなんとか社会に出していきたい」(EFP1) という思いを語られていたことから、「決意のナラティブ」が表明されていたように思います。「支え手を探す」ということでお母さんは動きだしたのですが、どのような支援が必要なのかわかりませんでした。このため「～としての A」という記号とそれにそった支援機関を模索されていくことになります。不登校

になった時点で「学校に行けないのは病気なのかもしれない」ということで医療機関に行かれます。ここでは「不登校児としての A」が記号として発生していることとなります。また、「発達障がいかもしれない A」「ひきこもりとしての A」などさまざまな「～としての A」が記号として発生し、支え手を求めて支援機関に足を運ばれます。しかし求めていた支援と違ったり、かえって疎外感を感じてしまう経験もされます。「僕は病気じゃない」という A の言葉は SD として作用しています。いくつかの記号は捨てられていくことになります。家にひきこもって「世間的には何ひとつ評価されてない A」に対して親だけが動き続けることへの不安や焦りもありました。やがて模索のなかから「支え手とつながる」ようになります。例えばひきこもりの親の会やひきこもり相談機関には今も継続してつながっておられます。

お母さんの語りから得た A さんの径路をお伝えします。親子の会話に戻ってしばらくして A さんの中では働こうと思い始めておられたようでその変化は面接の中で少しずつ語られました (Fig 2 参照)。

Fig 2 TLMG: 「記号」・「信念・価値観」レベル



本当に何年かぶりに昼の外出ができるようになり、服を購入したり、歯の治療に行ったりします。そして「僕は失敗するかもしれないが、とにかく自分の力でやってみたい」と言ってアルバイトの面接を受けることになります。来所相談で A さんがアルバイトを探していることはお母さんからお聞きしていたので、「もし面接がうまく行かなかった時にどのような声かけをするか」についてあらかじめ話し合っていて練習をしていました。残念ながら A さんはアルバイトの面接に落ちてしまいましたが、練習した「あなたのせいではないよ。ご

縁がなかったただだよ」と、さらに「Aのことを大切に思っている」という言葉を「あの子が生まれて初めて言えた」と語られました。

面接に落ちるという出来事自体は、ひきこもりの深化に向かうネガティブな要因になる危険性もあったはずですが、Aさん自身にとっては「自分に足りないものは何かがあった」という気づきになり高校卒業認定資格取得を目指していきます。お母さんは「この言葉がけてAは違う方向を考えようとしたのかもしれない」と振り返っておられます。このことはまた「子どもに思いを伝えることが出来た」という親としての自信につながる経験となりました。これを分岐点(BFP3)としました(Fig 2)。この経験と、お母さんの語りから「本人の力になれたという実感とその共有」をVTMとしました。

改めて整理をすると「個別活動」レベルでのプロセスがあって、もともと「理解できない子どもとしてのA」という記号があったのですが、お母さんが支え手を求めて動かれていくなかでいろいろな「～としてのA」という記号が発生していきます。そして支え手とつながり相談を続けるなかで、お母さんが主体的にとられたのが「納得すれば動きだせるA」という記号であったということになります。

親主導の「難しいかもしれないがAをなんとか社会に出していきたい」という等至点(EFP1)から3年の時を経て「本人の力になれたという実感とその共有」によって「Aが自分で目標を決めて行動するのをただ応援していく」関わりに変容しました。「決意のナラティブ」から、「よりそいのナラティブ」に変わったともいえます。

考察に参ります。本人であるAとお母さんとの相互作用、そして支え手とお母さんとの相互作用を、TLMGを用いて説明してまいりました。関係性のシャットダウンによってお母さん自身も親としての自信をなくしていました。Aとの会話を取り戻していくプロセスは親として自信を取り戻していくプロセスでもあると考えられます。システムが問題をつくるのではなく、問題(ニード)がシステムをつくるといえるかもしれません。クライアントと支え手との会話を通して現実が構成され、語る中で意味づけが変化していく。多くの記号が立ち上がり、捨てられていく中で、異なった記号が選択され、意味づけを変容していくプロセスであったかと思えます。第2回目のインタビューではそれまでの経過を描いたTEM図をみていただきながら径路を辿って行きました。これはお母さんとの支え手である私との共同作業ということがいえる

かもしれません。「個別活動」レベルでは親子の関係性を取り戻すプロセスでした。そして「支え手とのつながり」を模索しながら、親の自信の回復が「信念・価値観」レベルで起こったこととなります。「本人の力になれたという実感とその共有」が保証されることによって、本人の主体性を尊重し自信をもって関わるができるようになっていきました。

ひきこもりの問題は解決が難しい場合が多いのですが、主体的に子どもの問題に取り組むことができると親が実感できるということが必要ではないかと思えます。「親は子どものために何かができる、やってあげることができる」という実感を、例えば支え手である他者と共有する必要があるのではないかと思えます。そして親御さんが気づくご本人の小さな変化もまた、他者と喜びを共有する必要があるのではないかと思っています。

私の発表は以上になります。どうもありがとうございました。

#### 【引用文献】

高塚雄介 (2012). ひきこもり実態調査から見える思春期・青年期の心理的要因とアプローチ, 平成 24 年度内閣府困難を有する子ども若者支援ネットワークのための研修会事業講演会. (平成 24 年 9 月 7 日 主催: 宝塚大学).

サトウタツヤ (2009). TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う心理学をめざして. 誠信書房.